

| | | | | | |
|---------|--------------------------------|---------|---------|--------|--|
| 氏 名（本籍） | とみ 富 | ざわ 澤 | やよ 弥 | い 生 | |
| 学位の種類 | 博 士（医 学） | | | | |
| 学位記番号 | 医 博 第 2 5 7 1 号 | | | | |
| 学位授与年月日 | 平 成 2 0 年 3 月 2 5 日 | | | | |
| 学位授与の条件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 | | | | |
| 研究科専攻 | 東北大学大学院医学系研究科 （博士課程）医科学専攻 | | | | |
| 学位論文題目 | ADHD 児の母親へのペアレントトレーニングによる効果の検討 | | | | |

（主 査）

| | | | |
|--------|------------|---|------------|
| 論文審査委員 | 教授 土 屋 | 滋 | 教授 松 原 洋 一 |
| | 教授 根 東 義 明 | | |

論文内容要旨

ADHD (Attention Deficit/Hyperactivity Disorder; 注意欠陥/多動性障害) 児の予後は、反抗挑戦性障害, 行為障害, さらに反社会性人格障害へと展開していく DBD (Disruptive behavior disorders; 破壊性行動障害) マーチが大きな問題であり, 二次的に新たな障害をかかえていかないことは療養上の重要な課題である。

ADHD 児に対する治療は, 薬物療法と心理社会的治療からなり, 心理社会的治療の一つであるペアレントトレーニングは, 親が子どもに効果的な対処法を学ぶ行動療法であり, 現在すでに社会的ニーズが高く, 今後に期待されている治療法である。

本研究の目的は, ADHD 児の母親の主観的健康感, および日常生活場面における ADHD 児の行動について検討し, ADHD 児の母親へのペアレントトレーニングの効果について明らかにすることである。

対象は, ペアレントトレーニングに参加した母親のうち, 薬物療法を受け知的障害を伴わない ADHD 児の母親 24 名であった。調査は, ペアレントトレーニングの参加前と, プログラム全 10 回修了後の計 2 回実施した。主観的健康感は, 標準化された質問紙 SUBI (日本版 Subjective Well-Being Inventory; 心の健康自己評価質問紙) を使用し, 主観的健康感を構成する「心の健康度」「心の疲労度」およびその下位尺度のスコアについて, 日常生活場面における ADHD 児の行動は, 母親が評価した 18 場面のスコアについて, ペアレントトレーニングの前後で比較し, 検討した。統計解析は, Wilcoxon の符号付順位検定を行い, 正確有意確率を算出した。

その結果, ADHD 児の母親は, 「心の疲労度」が高いことを示していたが, ペアレントトレーニングにより母親の「心の疲労度」が軽減し, 「心の健康度」が向上することが明らかとなり, ペアレントトレーニングは母親のストレス対処に相乗的な効果をもたらすことが示唆された。さらに, 家族との関係改善, 家族や人生のとらえ方の変化がみられ, 母親の主観的健康感に, よい影響を及ぼすことが示唆された。

日常生活場面における ADHD 児の行動について, 18 場面中 9 場面において, ペアレントトレーニングによる行動の改善がみられた。さらに, 母親からみて ADHD 児の行動の問題が大きい場合, 最も問題が大きい「宿題をする時」をふくめ 12 場面の行動が改善し, 母親にとってペアレントトレーニングに参加する意義は大きいと考えられた。

以上のことについて, ペアレントトレーニングの母親への効果について統計学的検定を行なった最初の報告である。

審査結果の要旨

Attention Deficit/Hyperactivity Disorder (注意欠陥/多動性障害) (ADHD) 児への対応の一環として、ADHD をとりまく環境の整備は重要である。その中でペアレントトレーニングは、親が子供に効果的な対処法を学ぶ行動療法と位置づけられ、その有効性が期待されている。

ADHD 児の予後は、反抗挑戦性障害、行為障害、さらに反社会性人格障害へと展開していく DBD (Disruptive behavior disorders; 破壊性行動障害) マーチが大きな問題であり、二次的に新たな障害をかかえていかないことは療養上の重要な課題である。ADHD 児に対する治療は、薬物療法と心理社会的治療からなり、ペアレントトレーニングは、心理社会的治療法の一つである。本研究は、ADHD 児の母親の主観的健康感、および日常生活場面における ADHD 児の行動について検討し、ADHD 児の母親へのペアレントトレーニングの効果について明らかにした。

対象は、ペアレントトレーニングに参加した母親のうち、薬物療法を受け知的障害を伴わない ADHD 児の母親 24 名であった。調査は、ペアレントトレーニングの参加前と、プログラム全 10 回修了後の計 2 回実施した。主観的健康感は、標準化された質問紙 SUBI (日本版 Subjective Well-Being Inventory; 心の健康自己評価質問紙) を使用し、主観的健康感を構成する「心の健康度」「心の疲労度」およびその下位尺度のスコアについて、日常生活場面における ADHD 児の行動は、母親が評価した 18 場面のスコアについて、ペアレントトレーニングの前後で比較し、検討した。統計解析は、Wilcoxon の符号付順位検定を行い、正確有意確率を算出した。

その結果、ADHD 児の母親は、「心の疲労度」が高いことを示していたが、ペアレントトレーニングにより母親の「心の疲労度」が軽減し、「心の健康度」が向上することが明らかとなり、ペアレントトレーニングは母親のストレス対処に相乗的な効果をもたらすことが示唆された。さらに、家族との関係改善、家族や人生のとらえ方の変化がみられ、母親の主観的健康感に、よい影響を及ぼすことが示唆された。

日常生活場面における ADHD 児の行動について、18 場面中 9 場面において、ペアレントトレーニングによる行動の改善がみられた。さらに、母親からみて ADHD 児の行動の問題が大きい場合、最も問題が大きい「宿題をする時」をふくめ 12 場面の行動が改善し、母親にとってペアレントトレーニングに参加する意義は大きいと考えられた。

本研究は、ペアレントトレーニングの母親への効果について統計学的検定を行い、その有効性を明らかにした最初の報告である。しかし、システムとしてペアレントトレーニングを実施していくには克服すべき問題も多く、今回の研究は、その重要性を広く呼び掛ける上で、貴重なデータを提供した。

よって、本論文は博士 (医学) の学位論文として合格と認める。

